

巻頭言

再び複雑系の科学について

佐久間 貞行

最近科学雑誌や時には週刊経済誌まで「複雑系」の特集が組まれることが多くなった。また「複雑系」をテーマにした、ポピュラー・サイエンスのドキュメンタリーや解説書を多く見かけるようになった。中にはCD-ROMまで付録して複雑系への理解を深めようとする新書まで登場した。

複雑系は見方によれば秩序と変化、あるいは生と死、の均衡の上に成立すると言える。森羅万象どのレベルにおいても個々の反応は決定論的に法則性に従っているように見えても、全体としては個々の反応の和にはならない現象を示す。考え方によっては実験で科学性の現れとして求めてきた再現性とは何であったか。しかしこれは生体を対象とする医学では常に経験してきたことであった。

一度素直に時空を含めて、考えられるもの一つ一つの座標を設けて自分の周りを見れば全てが複雑系とも見なせよう。複雑で複合の様子が判らない場合でもそれを認めて、判るところまでデータを集積し、情報になりやすくかつリエゾンがし易いようにして格納しておくことが将来の科学の発展に繋げることになろうと考えている。そこでは風が吹けば、桶屋が儲かる話も可能性は零にはならないであろう。

(名古屋大学名誉教授、テルモ研究開発センター長)